あさ 5

2009

聖蹟桜ヶ丘

處々全真　　保多孝三著『柞廬印存』(一) より

「處々」＝ところどころ。いたるところ。
「處々全真」で、いたるところすべてが真理であるということです。いかなる場所も、仏法の発露の場所という意。『碧巌録』

刻字されてゐる語句は、すべて深い意味がある。この言葉も噛みしめるほどに滋味が湧出する。刻られる語句は保多先生のその折の心境の発露なのであらう。白文の太さを自在にあやつり、横画の間隔のゆれは見飽きない。　（佐藤喜孝）

あと

五　　月

盆栽

新中野　佐藤喜孝

囀や家の柱はみな四角
ねこやなぎ一光年とは近すぎる
濡縁の一枚ゆるぶ春の夢
引潮に春の地球のかしぎゆく
盆栽のやうに地球へ手を入るる

（『俳句界』3月号より）一句改作

新宿　堀内一郎

過去帳に戒名無き日春ゆくや
寺の縁切るかきらぬかつつじ緋に
葉桜ややがて篭りし身を起す
今のことはいま葉ざくらをくぐり抜け
行先は机の上の風信子

老幹

中井　森山のりこ

友禅とも岩根しぼりといふ椿
穏やかに馬頭琴聞く春の宵
阿修羅展観しより遠き春の雷
啓蟄や蟇の目間近庭暮るる
前線の一息つくか桜冷え

落合　森　理和

踏切から先の踏切諸葛菜
啓蟄や天井の節動き出す
春がすみ貝がらひろふ三つ四つ
焼そばの色付く様を花三分
老幹に宿りしは爺花見酒

草萌えに顔をつっこむ小犬かな
初蝶にまだ会はぬなり空青し
用水路ボール浮びて水温む
父母の写真磨けり彼岸まで
パンジーの咲き競ひをり朝の街

東大宮
山荘慶子

手のひらの薬とりどり春憂ひ
四季咲きの芙蓉次々咲きそむる
戸の口を花園にして春闌ける
春の風引っぱって来る男の子
どの子にも春の来てをりランドセル

新中野
吉成美代子

嬬恋の畦にころがる冬甘藍

妻恋鳥の響動(とよ)もすこゑの消ゆる涯

野良猫をつつみつくせる春日かな

塒から落してしまふ糞の嵩

乳母車梅の香まみれの三人かな

鍋屋横丁　吉弘恭子

野火

野火の闇車窓のゆびの文字も燃ゆ

鳩翔って永き日の宙汚しけり

ひばり笛空青きまでかなしめり

医師に肺託して月余鳥雲に

こゝろ縛す不況の中や櫻さく

西浦和　渡邉友七

保津川下り

清瀬　赤座典子

棹さしの胸板厚し春闌ける
しゅわしゅわと浅瀬曲れり山笑ふ
白光を岩に万朶の里桜
鉄橋にトロッコ電車山桜
麗日の渡月橋見ゆ旅の果て

曳舟　遠藤　実

夜桜や饂飩屋今日はおそじまひ
タンポポやいつも使ひし竹箒
菜種梅雨一人の膳にカンビール
藤の花犬語と少し話す人
朴の芽のにわかにほぐれ山動く

逗子　鎌倉喜久恵

夕靄にものの怪めける茅花の穂
鏡には母の顔あり春彼岸
問ふことをやめれば八十路寒き春
春涛に向ひて誰とも語らぬ日
菜の花や明日嬉しき人と会ふ

川崎・小田栄　木村茂登子

木の香たつ建築現場春隣
近道と思ひて迷ふ春の闇
ぬくぬくと胃の腑にじむ蜆汁
閼伽桶の家紋橘春彼岸
白隠の片手（左手首骨折）の公案涅槃西風

柳の芽切り取り線はこちらです
手づくりのスカーフ今日の花衣
人の出て猫うろうろと花埃
春深し困った顔のフラメンコ
春の草秀づるものは疎まるる

京橋
篠田純子

白梅のつぶやき程のかをりかな
さかさまに啄む鳥や梅日和
何といふことなき話春炬燵
老木に花さきがけてひよの友
恋すてふ知らないままに春の猫

千駄木
芝尚子

三月十日

下萌えの夫のふるさと嫋やかに
折れ口に親指隠し春日影
恋猫に丸く開けおく出入口
犬ふぐりキラキラ咲いて山の墓
三月十日恋しと思ふ逝きし人

宝仙寺前　芝宮須磨子

街に用

つのがふしぎで桃の節句のこんぺいと
蕗の薹ほおけてさうだ街に用
さびしさの集って犬ふぐりかな
にひばりの道のかたくり花ひらく
ところにより雨のふるとふ金鳳華

剱地東出（つるぎぢひがしで）　定梶じょう

歩くとは人のことなり梅日和

椿落つ唐突にきく師の訃報

ひたすらに山を歩いて春死なむ

山笑ふそろそろ髪を短めに

宇宙人めく二階の息子四月来る

所沢　須賀敏子

本を閉づ音のたちける雪の夜

紅梅や何も云はずにそばに寄る

つくしんぼ子供の頃の通信簿

冬薔薇刺の先まで意志通す

剪りつめしあぢさゐ冬芽微熱かな

本町三丁目　鈴木多枝子

蝌蚪の水

春の雪をどりをどりて着地せり
柊南天に薄日の廻りくる
堕ちながら天日昏むいかのぼり
老人と子供の頭蝌蚪の水
蕁麻を踏みしだきゆく猫の恋

浦和　竹内弘子

恋ふ

尼寺の恋文塚の遅日かな
母戀ふは心よはき日わらび餅
恋の句が出来ぬと蝌蚪の水の辺に
甲斐の山恋へども遠し春の水
夫居るは夢にてありし春炬燵

田端　田中藤穂

家桜三十八歳春の雨
囀や手長神社へ二百段
春の雨椎と樫とが隣り合ふ
文旦の掌を洩る光かな
春時雨大樹諸手を挙げて受く

三光坂　東亜未

雨

菜種梅雨納豆ぐるぐる三十回
菜種梅雨二時間置きのバス路線
菜種梅雨青を拡げて癒すかな
菜の花や休耕田に名知らぬ芽
下萌の摘み捨てらるる辛さかな

富田　長崎桂子

宇宙へのあくなき挑戦春の星

菜の花に蝶現れて初初し

通学路見守る人や春帽子

学童の保育所灯る春の夕

春寒しシャベル沈めて川光る

大宮　早崎泰江

春休特急満席小学生

遠足の先生特に大食漢

進級す先生生徒硫黄泉

山笑ふ裸のつきあひ露天風呂

いらっしゃいませ旧雛祭笑む女将

町屋　藤野寿子

いろは歌の一部を詠込んだ

竹馬やいろはにほへとちりぢりに　久保田万太郎

は人口に膾炙してゐる。他にも

貴椿うゐのおくやまけふこえて　神蔵　器

夕焼けやあさきゆめみてゑひもして　平井照敏

一葉落つあさきゆめみしゑひもせず　伊藤　格

五十音図からでも

かきくけこ山の夜蛙舌足らず　伊藤白潮

山蟻の列ガギグゲゴザジズゼゾ

姜琪東著『突進を忘れし犀』より

掲句は濁音を見事に生かしてゐる。意表を突かれたおもしろさである。この音は何回か読んでゐると脳内が掻き回されるやうになる。山蟻のうじやうじやとある脚の数や、はげしい動きが想像される。ガ行ザ行がそのまま、擬態語、擬音語になってゐる。

句集は小型本で一頁一句仕立の瀟洒で魅力的な装丁。著者略歴により俳号を「カン・キドン」と読むことを知る。横山白虹・加藤楸邨に師事とある。加藤楸邨には

日本語をはなれし蝶のハヒフヘホ

がある。

佐藤喜孝

一人一句

うなさかは春の項と知りにけり　佐藤喜孝

バレンタイン海の男にハートチョコ　藤野寿子

またの日のおほかたはなき桜かな　堀内一郎

憧れの五能線いま雪の中　森山のりこ

一膳の炊き立てご飯春の雨　森　理和

交番の一輪挿や冬日さす　山荘慶子

文旦や思ひの外のかろさかな　吉弘恭子

隣室もひそと相病む冬薔薇　渡邉友七

ころころと笑ひし頃の桜貝　赤座典子

肉厚の益子の器沈丁花　遠藤　実

春の闇すくって見たし時折は　鎌倉喜久恵

カニカマのこぼれ落ちたる恵方巻　木村茂登子

前月作品

チューリップ象の花子に歯のひとつ　篠田純子
春立つや大江戸線をひとめぐり　芝　尚子
子に添はれふるさとの駅冬日和　芝宮須磨子
福は内なぞと貧乏してをりぬ　定梶じょう
西伊豆の達磨山にも春の雪　須賀敏子
踏切のひねもす開き梅の花　鈴木多枝子
美声には遠くなりたる歌留多かな　竹内弘子
縫ひぐるみの兎と話し春近し　田中藤穂
眠る山抱へる犬にまだ温み　東　亜未
初午や甘辛濃い目いなりずし　長崎桂子
縄文は海原なりし枯木山　早崎泰江

喜孝　抄

四月作品より

王岩・佐藤喜孝

旅先の思い出雛と共に買ふ　　森山のりこ

冬は去り、春は来た。草木の萌え出る春景色に誘われて旅心が湧いた。すると旅衣を整え旅の空の人となった。子供のようにはしゃいだ気分で早春の旅を楽しみながら、旅先の店に並べてある可愛い雛人形を買った作者は、さぞかし少女時代に若返りした気持ちになったであろう。これに越した楽しい思い出はなかろう。

翡翠は残影ばかり春の川　　森　理和

翡翠　カワセミの異称。スズメより少し大きい小鳥。尾は短く、嘴は鋭くて長く、足は赤い。体の上面は暗緑青色、背・腰は美しい空色で、「空飛ぶ宝石」とも称される。特に両翼の間からのぞく背中の水色は鮮やかで、光の当たり方によっては、緑色にも見える。「翡翠（ひすい）」という名前の漢字表記はここに由来した。水辺にすみ、小魚やザリガニなどをとって食う。

夏、そこらを飛び交っていた翡翠の美しい姿は面影に立つものとなり、野川のあたりはもうすっかり春景色になったものだ。短い俳句は夏から春へと季節の移り変わりを見事に表現した。

かつて蕪村は『聯珠詩格』から三首の漢詩を選び、自作の『四季山水図』（湯浅家本）の「夏景」に題賛として書いた。それぞれ王烈孫の「春江漁父」、劉後村の「漁郎」、何橘潭の「傷春」である。

1　一縷糸綸一釣竿、
　扁舟風暖水漫漫。
　帰来満鬢楊花雪、
　莫作寒江独釣看。

一縷の糸綸　一釣の竿
扁舟風暖かにして　水漫漫
帰り来たらば鬢に満つ　楊花の雪
寒江独釣の看を作すこと莫れ

2

渓上漁郎占断春、
一川碧浪映紅雲。
問渠定是神仙否、
艫去如飛語不聞。
渓上の漁郎　春を占断す
一川の碧浪　紅雲に映ず
渠に問ふ定めて是れ　神仙なりや否や
艫去ること飛ぶが如く　語聞えず

3

荷葉初浮水上銭、
柳花飄尽岸頭綿。
不知春色帰何処、
欲向青山問杜鵑。
荷葉初めて浮かぶ　水上の銭
柳花飄尽す　岸頭の綿
知らず春色　何処へ帰るかを
青山に向かって　杜鵑に問はんと欲す

「夏景」に題賛された三首の漢詩の並べ方に蕪村なりの計算が認められる。画面の右下方より漁郎の乗る舟が漕ぎ出されて、柳に囲まれる水面を過ぎようとするところである。いつか漁郎は舟を漕いでどこかへ消えてしまうであろう。そのあとただ銭みたいな荷葉と散りし柳花とが水面に浮いているばかりである。春は去り、夏は来る。静止する画面は題賛の漢詩によって動感あふれるものと成り、春から夏へと季節の移り変わりを描いた。

前掲の句はただ十七音節で季節の変化を敏感に捉えた作品である。

交番の一輪挿や冬日さす　　山荘慶子

雑沓する町中の交番所。そこに一輪挿しの花瓶が置いてある。折から冬の陽射しがその一輪挿しに優しく降り注いでいる。まさしく『左伝・文公七年・杜預注』で言われたところの「冬日

可愛（冬日ハ愛スベシ）」であろう。
冬のありがたい太陽の光をいっぱい受け、花瓶に活けられた花枝までも可憐な花を咲かせている。

医師訪ふ心おもたく落葉踏む　　渡邊友七

どこか体の調子が良くない時、医者に診てもらうため病院へ行く途中の心情をさり気なく吐露した句であろう。別にたいした病気でもないのに、病院に通うだけで、なんとなく気分が重たくなる。おまけに満目蕭条の冬景色の中、はらはらと路面に散りし落葉を踏みながら歩いていく後姿は、気のせいか物寂しい雰囲気が漂う。

わかさぎの小さき頭ほろ苦し　　赤座典子

公魚は北日本の近海および淡水湖で捕れる小魚。形は香魚に似て細長く、全長は15センチメートル、全体は薄い銀白色。春の味覚として、焼魚・吸物・煮付け・鮨・膾などで食用に供する。公魚の小さい頭のほろ苦さという味覚で捉えた春意。

まっさきに春の寄せくる岬かな　　鎌倉喜久恵

海に囲まれた島国の日本は某岬という場所は多い。海に突き出た陸地の先端であるその岬は、どこよりも真っ先に春の便りが早く聞こえるところである。寄せてくる春潮とともに。

掌にのこる水玉たびら雪　　木村茂登子

たびら雪は春近くに降るうすくて大片の雪。だんびら雪とも。そのおおきな雪片は掌で受け取れば、ひんやりとした感覚が伝わると同時にすぐ露の玉と化し、そこに残る。恰も蓮の葉にたまっている露の玉のように美しく見える。

白梅やほろ酔ひの身は壺中天　　木村茂登子

壺中天は次の『後漢書・方術列伝』に出典し、「一壺天」とも。

市中に老翁あり、薬を売る。一壺を肆頭

に懸く。市罷むるに及んで輒ち跳びて壺中に入る。市人これを見るものなし。唯だ長房、楼上よりこれを覩、異とす。因りて往きて再拝す。翁乃ち与に倶に壺中に入る。唯だ玉堂厳麗にして、旨酒甘肴その中に盈衍するを見る。共に飲み畢はりて出づ。

漢代に壺公という薬売りがいて、一つの壺を店頭にかけて、夜になるとその中に飛び込んで寝ていた。ある時、費長房という町の役人が楼上からこれを見て不思議に思い、翁に頼んでともに壺の中へ入ってみた。中には立派な御殿が厳かにまた美しく建ち、美味しい酒や肴がいっぱいあった。そこで、ともに飲んで帰ってきたという故事に基づく熟語である。今は「壺中の天」は、①別世界、②酒を飲んで俗世を忘れる楽しみを形容する熟語として使われている。

前掲の句は微酔機嫌で暫し俗世間を忘れる楽しみを具現した。清らかな白梅がイメージした詩的世界は美しいかぎりで、「壺中日月長」の醍醐味を醸し出した。

僕もいつか異国での借住いを壺中の天に見立てて「障子して壺中の天を遊びをり」という駄句を詠みえた。

（以上　王岩）

福は内なぞと貧乏してをりぬ　　定梶じょう

貧乏が好きな人はゐない。私も例外ではない。

貧乏に追つかれけりけさの秋　　与謝蕪村

主人急逝

貧乏と子が遺るのみ梅の宿　　竹下しづの女

貧乏して植木鉢並べて居る　　尾崎放哉

貧乏は掛乞も來ぬ火燵哉　　正岡子規

貧乏が唯一財産猫柳　　篠田純子

かう並べると貧乏の受止め方も一様ではない。相対的貧乏の内はよいが、絶対的貧乏は閉口。金だけが福ではないと分ってゐる作者ではあるのだが……

（以上　喜孝）

春疾風元気で留守がＩＣＵ

春北風や急性Ｂ型大動脈解離

沈黙の待合室の雪柳

暖かや病院中に諏訪訛

東京に欠席届落し角

春吹雪湖畔に車数珠繋ぎ

院　未

入　亜

夫　東

春の朝頭掠めるピタゴラス

春の雨窓に羽飛ぶ記憶かな

あれまあと窓に寄りゆく牡丹雪

春の雪和毛となりて漂へる

春の雪山の目覚めを促せる

有難き故郷の山春の湖

なごやかにめをとの会話春うらら

特別作品鑑賞

佐藤喜孝

三月　新橋界隈　芝　尚子

一月に吟行した新橋界隈の句を纏めた尚子作品。私も旅の句は好きで作る。吟行も旅のひとつのかたち。しかし振返ると作品化への意識より旅情に溺れやすいのが私の欠点。「新橋界隈」は作品の最後に「若き日に」と前書された二句が添へられてゐる。今の新橋と比べることになり、作品が多面化した。吟行句もこのやうに異なる時空、蓄へられた時間を重ねることにより、より今が見えてくることを教へられた。

若き日に

空襲や駅舎に父母と冬ひと日

朝まだき寒き避難の人汽車に

四月　与論島　赤座典子

与論島と聞いても地図が浮んでこない。調べてみると、遙かな遠さ、東京とは船で二日ほどの距離。外国へもよく旅される典子さんにはこのぐらいの旅は朝飯前であらう。私には大分覚悟がゐる距離である。良き旅であられたやうで作品も活き活きしてゐる。島の澄んだ空気のやうな濁りのない作品。その地に立たなければ出来ない旅俳句であつた。

菜の花黄さとうきび畑ふちどりぬ

黒糖焼酎いかほど飲めば島人に

近世俳諧と漢詩文 2　拾九

王　岩

無心亭

さみだれや橙半黄なる時也　　各務　支考

支考、各務氏。寛文五年（一六六五）～享保十六年（一七三一）。蕉門の十哲の一人である。別号に東華坊や西華坊や獅子庵などがある。「無心亭」を題に詠んだ、この句は『聯珠詩格』に見える蘇東坡の七絶「贈劉景文（劉景文に贈る）」の結句を翻案した部に、上五「さみだれや」を配したものである。

荷尽已無擎雨蓋、　　荷は尽きて　已に雨を擎ぐる蓋無く
菊残猶有傲霜枝。　　菊は残りて　猶ほ霜に傲る枝有り

一年好景君須記、　　一年の好景　君須べからく記すべし
正是橙黄橘緑時。　　正に是れ　橙黄橘緑の時

劉景文はタングート族の西夏と戦った将軍劉平の子で、蘇東坡にこの詩を贈られた時、丁度五十八歳であった。その劉景文のイメージを晩秋の風物詩に具象させて、劉を励ます寓意を読み込んだ詩作であろう。これに対して、支考は七絶の結句を翻案し、季節を夏季に繰り上げて、「さみだれや橙半黄なる時」と詠んだ。「橙半黄なる時」という描写の背後に、漢詩への意識が読み取れよう。漢詩では実る晩秋の景色で、橙が黄色く完熟しているが、俳諧では夏の梅雨の時にほんのり黄みがさす橙をイメージした。「正是橙黄橘緑時」があってこそ、「橙半黄なる時」と詠むことができるはずである。

各務支考

むめが香の筋に立よるはつ日哉
歌書よりも軍書にかなし芳野山
馬の耳すぼめて寒し梨の花
船頭の耳の遠さよ桃の花
苗代を見てゐる森の烏かな
春雨や枕くづるる謡ひ本
七草やけふ一色に仏の座
鳥のねも絶ず家陰の赤椿
里の子が燕握る早苗かな
食堂（じきだう）に雀啼くなり夕時雨
牛呵る声に鴫立つ夕べかな
梢まで来てゐる秋のあつさかな
出女の口紅惜しむ西瓜かな
燕についてはひるや箱まはし
松風に新酒を澄ます山路かな

芭蕉翁病中

起さるゝ声も嬉しき湯婆哉
しかられて次の間へ出る寒さ哉

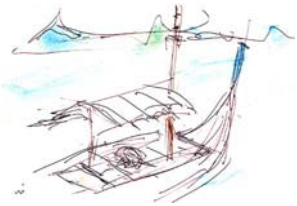
亡師をいたむ

鹿のねも入て悲しき野山哉
水仙や門を出づれば江の月夜
鶏の音も隣も遠し夜の雪
山鳥の樵夫を化かす雪間かな
野は枯てのばす物なし鶴の首
涼しさや縁より足をぶらさげる
つゝがなき母の便やころもがへ
見渡して久しがほなる燕かな
此里は山を四面や冬籠り
草の葉や蛍つかめば銭の嗅（かぎ）
虫共の啼てや我を涅槃像
羽二重の膝に飽てや猫の恋
菅笠を着て鏡見る茶摘哉
笋のどこでかぬけて縄ばかり
水やそら空や水なる比良の花
市人の板戸負（せお）ひてあられ哉
鶴に乗ル仕度は軽し衣がへ
三日月を箔と置ばや峯の松
鉢たゝき昼は浮世の茶筅売

あをかき集

堀内一郎選

（六人目以降五十音順）



どこか似し一族の顔涅槃西風　渡邊　友七

妻のさびしき顔を北風（ならひ）に連れありく

沼ねむし鳰の肉声沼に消ゆ

初蝶やはぐれ鴉の啼きて去る

一切を負へ百日の蟬青し

マスクから全く白きものこぼる　吉弘　恭子

玉子酒大河のごとくすべり落つ

日のなかに手折りてみたき姫椿

櫻さくななそにそつと近づきし

春昼や車中でうごく外国語　定梶じょう

流木にある日膝抱き受験の子

春の雲むかし鉛筆舐めにけり

丸太群製材待つよいぬふぐり

少女はもあくびひそかに春の虹

身のほどを知るといふこと目刺焼き　東　亜　未

彫像の仕上がりしごと春少女

凧日和鳶は凧をのぞきに来

お中日昔の煙草屋角の儘

雪解川巡りて母校の門に立つ

坂下る正面にある春夕日

春の風邪いつ罹りしか治りしか　芝　尚子

三月十日ひんがしの空赤く染む

水汲みて御無沙汰詫びて彼岸寺

雨のち曇くもりのち雨雪柳
過去は手の届かぬところ花水木
ほれぼれと立ち止るなり白木蓮
花見の声遠くきこゆる哲学の径
花見など我関せずや猫昼寝
ここちよく被れる春の帽子欲し
特急の窓に雪嶺一人じめ
北の旅梅見再び清らけく
春寒し八階屋上露天風呂
山笑ふ濁り湯混浴ナトリウム
さくら貝寄せて届かぬ波頭
初恋や梨の花咲く多摩堤
春の宵切切と沁む恋の唄
人の輪に温もり沸きし花三分
ロビーには大山桜明る過ぎ
花吹雪浴びて渡りぬ朱塗橋
夜桜や天女の衣舞ひ踊る
さまざまな雑学クイズ万愚説

早崎　泰江

藤野　寿子

森　理和

森山のりこ

暮の春九十四才大往生
花の中春ショールして義母の笑む
一人居や義母のアルバム春夕焼
吉兆の糾へるごと蜆汁
　前号正誤
春の夢その奇抜さに戻りたし
四月馬鹿隅田川に潜水船
春炬燵生活給付金こそばゆき
桜咲く徴兵検査に乙種あり
ビルの谷深く切れ込み労働祭
雛の箱今年も棚に置きしまま
引き汐に足をとられつ若布刈り
夜鳴きする恋猫なだめる術もなく
子猫居て雨戸一枚あけてをく
三世継ぐ仲良き姿内裏雛
縮緬も木綿も形見吊し雛
友遠方電話で交す花情報
対岸の花眺めをり花に佇ち

赤座　典子

遠藤　実

鎌倉喜久恵

木村茂登子

厚着とも見えぬ老尼へ春嵐　鈴木多枝子

初蝶のまづ草花に挨拶す

春禽の声の甘えて聞えけり

釣糸と我が身繋がる春の海

桜の蕾見る見るうちに太るげな　篠田　純子

春の雪人間臭き猫の顔

さりながら恋女房の花粉症

ぶっくりと大き泡立つ春の池

前前号正誤

初芝居露見まぢかの美人局　芝宮須磨子

黄砂ふる国の行方を透かし見る

木の芽時こはれた意識戻らない

菜の花や故郷明き黄金色

清明や高く吟じて友卒寿　須賀　敏子

マネキンの首の細さや春ごろも

単純を心掛ければ長閑なり

手作りの雛も早々片付ける

シャッターを頼まれてばかり花の山

上空に乱気流あり花菜畑　田中　藤穂

路地裏の夜気の甘みや春隣

晩学の眼鏡新調柳の芽

春の雪眼鏡店主のものしづか

雑巾がけさつさと終へて風光る　長崎　桂子

地場産の店の数増え風光る

堰を切る天の勢ひ春嵐

春の昼運転席に眠る男

一句燦々

どこか似し一族の顔涅槃西風　**友七**

涅槃会で集ったのであろう。誰彼とそっくりの人と出会うことがある。殊に女性など祖母に瓜二つのこともあった。そうなって来た不思議さ、それも風が連れて来

たのである。

マスクから全く白きものこぼる　　恭子

問題作である。マスクも白、全く白きとは見えぬものであることは解る。純粋性の強調にとれ、あらゆる現象を普遍的に捉えたと思う。もっとカンタンなことかも、ありきたりでは済まさない作者。

流木にある日膝抱き受験の子　　じょう

海或いは水辺の風景、感傷的な少年時代に引き入れる。流木に篭められる想いも半端ではない。春の雲と鉛筆も淡い昔へ。

彫像の仕上がりしごと春少女　　東亜未

このような現場は知らぬが一少女の初々しさ柔らかさを芸術品と讃えた作者の慧眼に恐れ入る。身辺作は日々是好日こころ豊かに。

春の風邪いつ罹りしか治りしか　　尚子

医師にも高齢だから予防注射だけはする様に言われたが近くの医者に断られ私はそのまんま。しかし陽気が解決してくれた。三月十日は私も忘れない葛西橋・小松川橋・亀戸周辺の惨景。

ほれぼれと立ち止まるなり白木蓮　　泰江

私は毎年三月十五日を目途にしている。遅速はあるが巨花は清々しい純白に心洗れる。

「心地よく被れる帽子」実は帽子が入を選ぶ。

特急の窓に雪嶺一人じめ　　寿子

月並だが壮快、読み手を良い気分にさせる。北への旅らしいが梅見など再確認は旅人をわくわくさせる。

外した名詞のみで成った三句、出来ているが遊び過ぎ。

さくら貝寄せて届かぬ波頭　　**理和**

さくら貝のロマンはやわらかく女心をくすぐる。波頭も変換して恋心にも。一連恋に、ご執心のようだ。恋に現を抜かすと言われるが、俳句で抜かしている分には罪はない。とにかく、お元気。

夜桜や天女の衣舞ひ踊る　　**のりこ**

今年は桜を十分見せてもらった。夜桜の妖しさに人は魅せられ足を引き摺る。あの光景はまさに天女のワンマンショー、大きな掴み方は勇気もいるし、この断定こそ一朝一夕では得られぬ経験からで、名品となった。

暮の春九十四才大往生　　**典子**

実感だが親族の哀しみを裏側に何故か晴ればれしている。悔いなき一生を成し遂げた所産で陽に転じるのである。吉兆の糾へるは「吉と凶糾へる」でも。

四月馬鹿隅田川に潜水艦　　**実**

上五の断りがあるが意表をついて好調である。平和と戦時体験が頭に渦巻く作者。

給付金私も申し込んだ夫婦で四万円也。

子猫居て雨戸一枚あけてをく　　**喜久恵**

子猫も家族、雨戸一枚に情が篭る。だから一枚、大きくなれば細めに、やがてひとりで開ける。

対岸の花眺めをり花に佇ち　　**茂登子**

薄味は年をとると好みになってくる。淡白は衰えもあるが安心出来る。花の下に立ち遠方の花を眺める可笑しさ。

初蝶のまづ草花に挨拶す　　**多枝子**

挨拶と思ったのは感情移入、作者は初蝶になっている。俳句を楽しんでいる。裏返しだけれど瀧先生に

朝だけは辛夷の花に話しかける　　春一

がある。思い出深い。

桜の蕾みるみるうちに太るげな　　純子

上五中七は普通の域なのだが下五でガクッときた。この変身は見事。

「さりながら恋女房の花粉症」は、親しい呼びかけで、目先も鋭いが「花粉症」などと慎しく。

木の芽時こはれた意識戻らない　　須磨子

随分激しく中七が気になる。自身ではなさそうだが季節の変り目。明日はわが身の不安感をそそる。

単純を心掛ければ長閑なり　　敏子

どうしてもしがらみに呑み込まれる。そこからの脱出に外ならない。平静になれば自ら楽になろう。作者の座右の銘か。

路地裏の夜気の甘みや春隣　　藤穂

昔ながらの佇いから生まれる温かみである。親しさが甘みへ感受性のときめき。

春の昼運転席に眠る男　　桂子

夜っぴで遠方まで運転して来たのであろう。それとも寸暇か、眠る男に厳しい社会経済状況の一面が見てとれる。

あを吟行会のお知らせ

五月　両国横網町公園

集合地　両国駅西口
日　時　5月17日（日）午前11時
句会場　未定
申込み〆切　5月12日
申込先　篠田純子　03　5250　2776

六月　葛西臨海公園 水族館
集合地　葛西臨海公園　駅
日　時　6月21日（日）午前11時
今回は水族館を中心に吟行します。

三月の句会

傳　中野区　カフェ傳

雪代山女洋皿の縁輝いて　敦子
啓蟄や天井の染み動き出す　理和
雪しづく古き映画に見入りをり　藤穂
春の雨乾きはじめの道が好き　喜孝
木の香立つ建築現場春隣　茂登子
野良猫をつつみつくせし春日かな　恭子
目も鼻もかくれむばかり田水張る　弘子
ぶつかって進む夕潮三月来　綾子
鳥雲に平常通り新幹線　寿子
無器用なままの父と子蕗のたう　典子
春の雪人間臭き猫の顔　純子
単純を心掛ければ長閑なり　敏子
河童棲む話の里の獨活酢味噌　実
何といふことなき話春炬燵　尚子

調　さいたま市 岸町公民館

上空に乱気流あり花菜畑　藤穂
羽箒に春塵はらふ哲学書　弘子
石鹸玉表通りへ出るつもり　綾子
桜さく学べ遊べと金次郎　寿子
草萌えに顔をつっこむ小犬かな　慶子
木蓮の白き光にかすむ空　泰江

あを吟行会　中野哲学堂

花こぶし鳥語はルビのごとこぼれ　木枯
かんばせをすつとすぎたる花の影　恭子
ぷつくりと大き泡立つ春の池　純子
踏切から先の踏切諸葛菜　理和
哲学は難しからず花見酒　一郎
春寒しシャベル沈めて川光る　泰江
老木に花さきがけてひよの友　尚子
花は五分ゆるゆると行く乳母車　藤穂
まひるまのだあれもゐない花むしろ　喜孝

七座（ほくと）句会　中野区・小川苑

さりながら恋女房の花粉症　純子
嬬恋の畦にころがる冬甘藍　恭子
それぞれの桜のたより古都の庭　房代
春荒は戀の一字に似てゐたり　喜孝
黄を厭ふごとく山吹咲きにけり　木枯
初恋は梨の花咲く多摩堤　理和
だんだんと卒業式に飽きにけり　大佳
母恋ふは心弱き日蕨餅　藤穂
そらんずる恋歌のあり山笑ふ　綾子
恋猫の出かける前の伸び一つ　夏子
下萌えの夫のふるさと嫋やかに　須磨子
つくしんぼ子供の頃の通信簿　多枝子

連句勉強会　毎月第2日曜
12時半　中野坂上ジョナサン　(090-9828-4244)

傳句会　毎月第2火曜
カフェ傳　森　理和
(03-3368-4263)

調句会　毎月第3金曜
岸町公民館　竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会　毎月第4火曜
小川苑　吉弘恭子
(090-9839-3943)

「あを柳集（やぎ）」のお知らせ

絵は絵の具で描くのと同じやうに、俳句は言葉で書く。言葉は絵の具。この欄ではひとつの言葉を多面的に観察して俳句表現の幅を拡げやうといふコンセプトで開設しました。「あを」には「作品集」「あをかき集」「特別作品」と発表する場があります。「あを柳集」は余力のあるときに参加して下さい。

一回目は「杉」。漢字「杉」を俳句に詠込んで下さい。杉は昭和十九年頃から歌はれた〈むかしむかし そのむかし／椎の木林の すぐそばに／小さなお山が あったとさ あったとさ　ではじまる「お山の杉の子」は懐かしい。その杉の子の花粉が今人間を困らせてゐる身近な樹木でもあります。。

伐り口鮮し雪空へ積む杉丸太　　高島　茂
野分の燭杉形に三人姉妹なる　　中村草田男
雪ふるや姿正しく杉檜　　青柳志解樹
杉林あるきはじめた杉から死ぬ　　折笠　美秋
フラミンゴ北山杉のやうにをり　　大平　節弥
杉の間を音ある如く夏の蝶　　星野　立子
杉箸の封ぷっつりと夏料理　　小沢　昭一
泣蟲の杉村春子春の雪　　久保田万太郎

第一回「杉」　選者　佐藤喜孝
〆切　六月末日　用紙・句数自由
送付先　東京都中野区中央二の五〇の三

二〇〇九年五月号
発行日　四月二十九日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090-9828-4244
佐藤喜孝
竹僊房
印刷・製本・レイアウト
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。